

## 1 國分の場所

この章はこれまで以上に、著者が丁寧に議論の流れを追っている。なので、それについては触れない。このレジュメに書いてみたことは、著者がどういった場所で、アレントやフーコーの議論をとらえているかということだ。アレントの選択と意志のクリアカットな定義とアレント自身は迷走してしまった(とされる)議論を経由し、フーコーの権力論を援用して、中動態の具体的イメージ(=カツアゲ)を組み立てた、その場所はどこか。

具体的には、以下の記述が該当する。少し長いが省略せずに引用する。

選択が過去からの帰結であり、決して純粋な始まりではないとすれば、われわれは選択における意識の役割もあらためて定義することができるだろう。

意識は選択に影響を与える無数の要素の一つである。意識の中で行われる思考、あるいは意識することのできる思考は、精神のなかで行われているのだから、精神のなかに留まり、意識されない精神の諸活動に影響を与えている。

さまざまな要素が参与しているのだから、意識された思考が選択を決定するわけではないだろうが、意識が選択とまったく無関係なわけでもないだろう。意識されない思考が意識される思考に影響を与え、意識される思考もまた意識されない思考に影響を与える、そのような相互作用を思い描くことができる。

絶対的な始まりとしての意志を認めなければ、意識や選択は無意識によって一方的に決定されていることになってしまうと思う人もいるかもしれない。

だがそのように思ってしまうのは、それまで自分が意志と行為あるいは意志と選択の間にぼんやりと想定していた関係を、意識されないものと意識されるものとの関係にも投影してしまうからである。意志が一方的に行為や選択を決定するという考えにあまりにも慣れてしまっているために、意識されないもの(無意識)と意識されるもの(意識)についても、一方が他方を一方的に決定すると考えてしまっているのだ。つまり、意識されないもの(無意識)が意識されるもの(意識を)一方的に決定することになってしまう、と。

選択は無数の要素の影響を受けざるをえず、意識はそうした要素の一つに過ぎないとしたら、意識は決して万能ではない。しかし、それは無力でもない。

意志という絶対的な始まりを想定せずとも、選択という概念——過去からの帰結であり、また、無数の要素の相互作用のもとにある——を通じて、われわれは意識のための場所を確保することができる。むしろ意志の概念を斥けることによってこそ、意識の役割を正当に評価することができる。[134-135]

まず、気づくこととして、ここでは「意志」は重要性を失い、「意識」という語が代わりに表面化している。意志という言葉は、アレントのクリアすぎる定義によって、この思考空間では事実上、使うことができなくなっている。また、意志の定義に含まれている「絶対的な(始まり)」から生じる「一方的に決定される」ことも否定的な位置に置かれている。それに対して、重要だとされている語は「相互作用」だ。絶対的でクリアに定義される「意志」を斥けることで「意識の役割を正當に評価することができる」というのは、とても現実的な思考である。簡単に言えば相対主義である。

相対主義とは、経験ないし文化の諸要素やその見方が、その他の複数の要素や見方と相対的關係すなわち相互依存關係にあるという考え方である。例えば、背が高い人は、彼よりも背が低い人がいなければ想定しえない。(略)相対主義の前提に立てば、他者に全く依存しない絶対的に背が高い人は存在せず、背が高い人と背が低い人とは相互依存關係にあると言うことができる。(ウィキペディア「相対主義」)

もし國分の議論がこの相対主義的な意識・無意識相互作用論に還元されて、ここで終わってしまえば、ほとんど何も言っていないに等しい印象を与えただろう。また、中動態を具体的にイメージしたカツアゲの事例があまりにもわかり易すぎて、前章までの、失われたパースペクティヴを取り戻すことの難しさの議論が遠く霞んで見える。

ここで問題として残るのは「ごく現実的にすべてが相互作用のなかにあるだろうこの世界にも関わらず、なぜ我々は意志のような(よく考えてみれば)絶対的なものが、あたかも当然のごとく存在するかのように思っているか」だからだ。

それを探るために國分は言語的(文法的)アプローチを取ってきた。つまり、かつてあった中動態が、なぜ、どのように退いて、現在のような能動と受動が支配的になったのかという「言語の歴史」の問題を見ることによって、それによって要請された「我々の現実の意識の場所(意志があることになっている現実)」が検証できる。言語の歴史を見ていくことで、我々の意識が何かしらをなしているように感じる現実の意識の場所そのものがどのように言語から要請されてきたのかがわかるという筋書きだ。

この構造の前提としてあるのは「言語は思考の可能性の条件である」という〈バンヴェニストの場所〉である。しかし、相対主義的な相互作用を無限定に認めてしまえば「思考は言語の可能性の条件」という逆向きの作用も成立するのではないか。そしてこの逆作用は極めて常識的な視点だ。次章「言語の歴史」はどのようにバンヴェニストの場所を見出すのか。

以上